遠隔医療・オンライン診療の現状と課題（Ⅲ）

オンライン診療の実際　歯科

日本遠隔医療学会歯科遠隔医療分科会会長
長　縄　拓　哉
（聞き手　大西　真）

大西　長縄先生、歯科の領域でオンライン診療というのは、どのような状況なのでしょうか。

長縄　もともと歯科というと、皆さん想像するところで言うと、歯医者さんに行って、虫歯を削って詰めたり、入れ歯の型を取ったり、実際に患者さんにさわらないと診療ができないと思われる方がけっこういらっしゃるかと思います。実際、臨床の現場で行われていることは、患者さんに触れないとできない外科処置はもちろんそうですが、それだけではなくて、コンサルテーションなど、信頼関係を得るために話をすることが重要です。そういう面で実際に患者さんがその場にいなくても、オンラインでそれを行うことはできるのです。なので、一般の開業医たちも、実際に普段の臨床の治療の流れの中にオンライン診療を組み込んでいったり、組み合わせてうまく使っていただいている場面が多くなってきたという実感はあります。

大西　クリニックや少し規模の大きな病院でも、最近はそういうものを組み合わせて導入しているところが増えてきていると考えてよいのでしょうか。

長縄　あくまで診療の補助として対面診療と組み合わせて行います。オンライン診療だけで治療が完結することはもちろんありません。ただ、歯科の特性上、大きな病院よりは開業医が個人で行われているというシーンが多いかと思います。

大西　少し具体的にうかがいたいのですが、まず今、口腔ケアが非常に重要だと、新型コロナの感染対策でも重要ということがかなり強調されていると思います。口腔ケアの指導やいろいろなアドバイスなどは、先生はオンライン診療でどのように行っているのでしょうか。

長縄　私は在宅医で訪問診療をしているので、外来はほとんど行っていません。例えば介護施設や歯科のない病院などに私が訪問して、現場で口腔ケアを手取り足取り教えながら、一緒に行ってみるということを普段やってい

ます。私はそもそも週に１回しか行かないので、ほかの６日間は現場にいる看護師や介護士が口腔ケアを担っています。現場で困ったことがあってすぐ相談したいときにオンライン診療を用いると、私のスマートフォンやクリニックのスマートフォンが鳴って、医療通話をつないで実際に口腔ケアを行っているところとか、例えばこんな感じに「入れ歯が割れちゃったんです」とか、そういうときに画像を一緒に見ながら指示をすることができます。

大西　介護の現場では高齢の方が多いと思うのですが、口腔ケアは具体的にどのように指導されているのでしょうか。

長縄　オンラインでやることは、実際にぷらぐら対応などがほとんどですが、私が現場にいれば、指さし確認しながら歯ブラシで、「こうやってやるんだよ」というのを見せながらできるのです。でも、なかなかそれがオンラインになるとうまくいかないこともあるのです。もちろんさわれません。なので、コミュニケーションをうまく取ることがけっこう重要になってくると思います。

大西　高齢の方だと嚥下機能や、そしゃくなどもかなり問題になりますね。下手をしたら誤嚥性肺炎を起こしたりしますので、そのあたりもいろいろアドバイスができるのですね。

長縄　そうなのです。オンラインでも、画面を通すだけ、例えば食事を介助しているところを少し引いたかたちで撮影してくれたりすると、患者さんの姿勢も見えます。またとろみの具合とか、１回量がどのくらいの量なのかを、直接そこにいなくても判断することができます。

大西　普段の様子がわかるということもありますね。

長縄　歯科クリニックで入れ歯を調整しても、結局、家に帰ってごはんを食べるとそれが見えないのですが、オンライン診療になると、日常どのようなかたちで家族の方と一緒にごはんを食べているかとか、普段の様子が見えるのです。なので、オンライン診療のほうがアドバンテージがある面もあるかと思います。

大西　歯が急に痛くなるとか、出血したとか、それこそ折れたとか、そういう場合もオンライン診療はサポートの手段として重要なのでしょうか。

長縄　例えば、緊急時の対応というのは、やはり見てみないとわからない、さわってみないとわからないので、向いていないと思います。ただ、介護施設でのトラブル対応は、スタッフの方に緊急時の指示をすることができますし、必要だったら「これから行きますよ」ということもできます。

大西　患者さんにとっては安心ですよね。

長縄　そうですね。患者さんもそう

ですが、スタッフの方が安心していただけると思います。

大西　介護施設のスタッフの方もたいへんでしょうから。課題といいますか、何か気づかれている点はありますか。

長縄　例えば、先ほど申し上げたとおり、私が訪問診療しているのは一つの施設で週に１回だけなのです。そこに働く口腔ケアをしている看護師や介護士の方たちは、学校で口腔ケアを１コマぐらいしか勉強していないのです。ただ現場に出ると、習っていないのに「１日３回やってください」と言われる。誰から教えてもらうかというと、本来は先輩の看護師や介護士に教えてもらうのですが、先輩も教わったことがないのです。なので、口腔ケアの教育をゼロからでも、ゆっくりでも、適切に行えるようにしていく必要があると思っています。

大西　先生は実際、そういう介護士や看護師の方々と、普段どのようにコミュニケーションを取ったり指導をされているのでしょうか。

長縄　実際の指導はほとんどがやっているところを見せてもらって行っています。

大西　それはいいですね。画面で見られますよね。

長縄　その後に私がやってみせて、同じようにやってみてください、というような流れです。口で説明してもわからないこともありますので、たまに撮影した動画を持っていったりします。オンラインで画像を共有することもできます。

大西　新型コロナが蔓延している状況で、感染対策の一環として口腔ケアの重要性が強調されていますよね。介護施設でもクラスターが出たりしていると思うのですが、何か今の時期で、先生が指導にあたって気をつけていることはありますか。

長縄　口腔ケアを行っている現場は、施設によっては歯ブラシを使って患者さんの口をさわっているのに、介護士が手袋をしていなかったりしています。マスクはもちろんしていると思いますが、今の時期はフェイスシールドとかガウンとか、ぜひ使っていただきたい。というのは、患者さんの目の前に立つというシーンがけっこうあるのです。のぞき込みますし、近いのです。

大西　リスクがありますよね。

長縄　そうなのです。唾液が飛んできますので、それを知っていただくことが大切かと思います。

大西　それは非常に重要な点ですね。先ほど教育体制が十分でないという話があって、医師も以前は口腔ケアにあまり関心がなかったと思うのですが、そのあたりの教育は全般的に底上げが必要だと思うのです。先生は何かそういう推進はされているのですか。

長縄　訪問看護支援協会という看護

師の協会があって、そちらと一緒に口腔ケアの勉強会を３年間ぐらい、認定資格講座を作って行っています。看護師を中心に、介護福祉士、医師も含めて、今では800人ぐらい認定されています。全国で活躍しています。

大西　口腔内の清潔とか、そういった点が全身的な病気とかなり関連が深いことが最近随分言われていますね。

長縄　実際そうだと思います。もちろん誤嚥性肺炎もそうですが、認知機能の低下が抑制されたり、奥歯でかめることがとても重要だったり、糖尿病と歯周病の関係などがあります。

大西　介護施設の方々には、例えば１日何回ぐらい歯を磨くとか、そういう指導をされているのですか。

長縄　口腔ケアは日々の看護や介護の中で優先順位が低めに設定されていて、人それぞれですが、１日３回と言っています。ただ、１日３回は難しいのです。なので、せめて１日に１回だけはしっかりケアをする。ほかの２回はそこまでしなくてもいいかもしれないという、なるべく現場の負担にならないように続けることが重要だと思います。

大西　今後、歯科領域のオンライン診療はどのように発展していったらいいと思われますか。

長縄　オンライン診療全般に言えることだと思いますが、あくまでも我々が普段やっている外来診療や病棟での業務、そこに一つ新たな選択肢としてオンライン診療があると思っています。これから普段の外来と病棟と訪問診療の現場にうまくオンライン診療を組み合わせて、無理に普及させる必要もないと思っています。必要なときに必要な場所で必要な患者さんに届けられればいいと思っています。

大西　ありがとうございました。